

「念仏的人生」

お念仏のみ教えに生きている方を紹介したもので『われら念仏に生きる』（編一亀井鑛）という本があります。

その中に永尾医院（静岡県）の院長である、永尾雄二郎という方のことが紹介されていました。

氏はご自分の医学を「念仏医学」と仰っていますが、ある患者さんで、70歳過ぎて中風が出た人がいました。往診していても、どうもはかばかしくない。ところが、その枕元に次のような色紙が掛けられてあったというのです。

いらいらやくよくよもせず
おおらかに
悠悠自適 老いの坂路を

「誰に書いてもらったの？」

「ある偉い先生から」

「これで落ち着けるの？」

「中々おおらかにいけませんわ」

「そうですね。私ならこう手直ししますよ」

いらいらやくよくよのみの人の世も
なごりなつかし
今日の日

「これならどうですか？」

「あ、先生。イライラクヨクヨばかりでいいんですか。それがなごりなつかしい・・・そうですね、そうですね」

と、うなずかれ、それからの闘病生活は、打って変わって明るいものになり、病状も改善されたと言われています。

ちなみに、前者の歌は、自力の教え（一般仏教）で、後者は他力の救いを説く教え（浄土真宗）と言えるでしょう。

長年、念仏の教えに親しんでこられた方だけのことはあって、氏の手直しされた色紙は、念仏の教えが医療の現場で見事に生きていることを物語るものだと思います。

ここで誤解しないで頂きたいのは、前者の歌のような生き方が悪いと言っているのではありません。

イライラクヨクヨせずにおおらかに生きることができれば、それは素晴らしいことです。ただ、そのような生き方が私にできるのかということです。

実は、親鸞聖人が二十九歳まで求め続けてきた道も、前者の歌のような道（自力の道）だったのです。

そこには、20年間にわたる命がけの求道の遍歴があったのです。厳しい修行を重ねるほどに、自力の道のいよいよ遠いことを知らされたのです。

そんな絶望のどん底の中に出遭ったのが「お念仏の道」だったのです。

それは「愚かな者だからこそ救わずにはおれない」という阿弥陀さまの本願（根本の願い）の道でした。

本書には38名の念仏者が紹介されていますが、一様に、「念仏の教えに出遭って、自分が見えてきた」と、語っています。

自分中心で、自分が正しい、自分は賢い、自分は善人のつもり、頭の高い人間・・・そんな愚かで思い上がった自分が見えてきたと言っています。

ここが大変、大事なところですよ。

阿弥陀さまの本願に出遭うと、阿弥陀さまに見抜かれた私の姿が見えてくるのです。

それは自分では決して見ることの出来ない我が身の姿です。

それを親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫」とか「罪悪深重の凡夫」と仰っています。

そんな自分に気付くと、「仏さまの前ではごまかしは効かないんだなー、ありのままにいたらいんだなー」ということが分かってきます。

そうすると、見栄を張ったり、無理に背伸びをしたりする必要がなくなってくるのです。

このことが分かると、私たちの生き方は実に楽になります。

それが永尾雄二郎氏の歌の心につながるのです。

前者の歌のように、イライラクヨクヨしてはいけないと言われれば、私たちは、どうしてもそれにとらわれます。

ところが、イライラクヨクヨばかりの自分だと分かれば、却ってそれにとらわれなくなるものです。

それはあたかも、こんがらがっていたヒモが、一つ一つ解けるような、まことに爽やかな気分になるのです。そうして、生きる意欲がわいてきます逆境を「これもよし」と受け止めていく力も備わってきます。

このように、ありのままを、み仏の懐に抱かれて生きていくということは、私たちに計り知

れない大きな安らぎを与えてくれます。

患者さんの病状が良くなったということも、これで頷けます。

「念仏者は無碍の一道なり」とおおせられていますが、まことに障りのない日暮しを実現するのです。

平成14年11月 「光明寺だより24号」より